



6月末予定

バルトの主著『教会教義学』は20世紀神学における最も重要な貢献の一つだが、邦訳で36巻に及ぶ膨大で複雑な内容」は、通読はおろか全容を見通すことも困難である。本書は、生涯にわたり『教会教義学』に取り組んできた著者が一般読者のために試みた平易な道案内であり、バルト神学への無二の入門書ともなっている。

寺園喜基 [著]

カール・バルト『教会教義学』の世界

連載を大幅増補、待望の単行本化!

◆四六判・352頁・予価3000円

目次

序章 『教会教義学』に至るまで

第一巻 『教会教義学』への序論

- 1 神、語り給う / 2 三位一体の神 / 啓示の根拠 / 3 言葉の受肉 / イエス・キリストにおける啓示の出来事 / 4 聖霊の注ぎ / 人間における啓示の受容 / 5 聖書 / 啓示の証言 / 6 説教 / 教会に委託された啓示

第二巻 神についての教説『神論』

- 1 神の認識 / 2 自然神学の否定 / 3 神の現実性 / 4 大いなる神のドラマ / 5 福音の総計としての神の恵みの選び / 予定論 / 6 神の戒め / 神論における倫理学

第三巻 創造についての教説『創造論』

- 1 創造者なる神を信じる / 2 創造と契約 / 3 人間の創造 / 4 神の摂理 / 創造者なる神の被造物への配慮 / 5 虚無的なもの / 6 天使論 / 天の国・神の使い / 敵対者 / 7 創造論における倫理学の課題 / 8 神の前での自由 / 9 交わり

- 11 生への自由 / 12 生への自由 / 13 生への自由 / 14 生への自由 / 15 生への自由 / 16 生への自由 / 17 生への自由 / 18 生への自由 / 19 生への自由 / 20 生への自由 / 21 生への自由 / 22 生への自由 / 23 生への自由 / 24 生への自由 / 25 生への自由 / 26 生への自由 / 27 生への自由 / 28 生への自由 / 29 生への自由 / 30 生への自由 / 31 生への自由 / 32 生への自由 / 33 生への自由 / 34 生への自由 / 35 生への自由 / 36 生への自由 / 37 生への自由 / 38 生への自由 / 39 生への自由 / 40 生への自由 / 41 生への自由 / 42 生への自由 / 43 生への自由 / 44 生への自由 / 45 生への自由 / 46 生への自由 / 47 生への自由 / 48 生への自由 / 49 生への自由 / 50 生への自由 / 51 生への自由 / 52 生への自由 / 53 生への自由 / 54 生への自由 / 55 生への自由 / 56 生への自由 / 57 生への自由 / 58 生への自由 / 59 生への自由 / 60 生への自由 / 61 生への自由 / 62 生への自由 / 63 生への自由 / 64 生への自由 / 65 生への自由 / 66 生への自由 / 67 生への自由 / 68 生への自由 / 69 生への自由 / 70 生への自由 / 71 生への自由 / 72 生への自由 / 73 生への自由 / 74 生への自由 / 75 生への自由 / 76 生への自由 / 77 生への自由 / 78 生への自由 / 79 生への自由 / 80 生への自由 / 81 生への自由 / 82 生への自由 / 83 生への自由 / 84 生への自由 / 85 生への自由 / 86 生への自由 / 87 生への自由 / 88 生への自由 / 89 生への自由 / 90 生への自由 / 91 生への自由 / 92 生への自由 / 93 生への自由 / 94 生への自由 / 95 生への自由 / 96 生への自由 / 97 生への自由 / 98 生への自由 / 99 生への自由 / 100 生への自由

第四巻 和解についての教説『和解論』

- 1 僕としての主イエス・キリスト / 1 和解決の構造 / 2 神の子の従順 / 3 父の判決 / 4 人間の傲慢と墮落としての罪 / 5 人間の義認 / 6 聖霊とキリスト教団の集まり / 7 聖霊とキリスト教信仰
- 2 主としての僕イエス・キリスト / 1 人の子の高擧 / 2 王的人間 / 3 御子の訓令 / 4 人間の怠慢と悲惨としての罪 / 5 人間の聖化 / 6 聖霊とキリスト教団の建設 / 7 聖霊とキリスト教的爱
- 3 真の証人イエス・キリスト / 1 真の証人イエス・キリスト / 2 生の光 / 3 イエスは勝利者 / 4 御霊の約束 / 5 人間の虚偽と断罪 / 6 人間の召命 / 7 聖霊とキリスト教団の派遣 / 8 聖霊とキリスト教的希望
- 4 和解論における倫理学『断片』 / 1 洗礼論 / 2 「主の祈り」の講解

● 5 月刊行

ユダヤ人も異邦人もなく

パウロ研究の新潮流

山口希生著

◆四六判・定価 2475 円

信仰義認論を最重視する従来のパウロ理解に異議を申し立て、新約学界で激しい論議を呼んでいる「パウロへの新しい視点」(N P P)。その起源から最新の議論までをカバーした本邦初の本格解説書。



● 4 月刊行

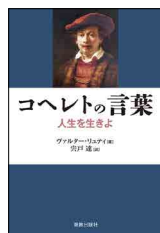
コヘレトの言葉

人生を生きよ

W. リュティ著／宍戸達訳

◆四六判・定価 2310 円

コヘレトをニヒリストとしてではなく、神への信仰に立って自らの人生を生きることを勧める人物として読み解く。傑出したスイスの説教者が 1951 年から翌年にかけてベルンで語った 12 編。([『伝道者ソロモン』を改訳・改題])



● 3 月刊行

交差するパレスチナ

新たな連帯のために

在日本韓国YMCA 編

◆四六判・定価 2640 円

注目を集めた連続シンポジウムの待望の単行本化。〈交差性〉の概念を手掛かりに考える。寄稿者＝ニダル・アブズルフ／金城美幸／北川真也／阿部小涼／保井啓志／中村一成／太田昌国／役重善洋／早尾貴紀。



● 3 月刊行

旧約聖書 文学書

要約と概説

宮平望著

◆A5 判・定価 2090 円

好評の旧約解説シリーズ第 3 弾。旧約の複雑多様な世界を読み進めるための絶好の手引き。本巻はヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌を扱う。次の「預言書」で全 4 巻完結。



関口安義著

内村鑑三 闘いの軌跡

内村鑑三の激動の生涯を実証的な調査に徹して描き切った評伝大作。著者は芥川龍之介研究から出発し、芥川人脈に連なる多くの知識人の評伝をものしてきた。本書は2019年に上梓した『評伝矢内原忠雄』に次ぐ著者のライフワークであり、遺作となった。

A5判・予価8000円

マシュー・ホケノス著／穂田信子訳

マルティン・ニーメラー ヒトラーに逆らった牧師 「仮題」

アメリカ人教会史家が冷静な筆致で著した最新の評伝。第一次大戦ではUボートの艦長として戦い、牧師に転身した後もおナシヨナリストで、当初はナチに共鳴したが、やがて批判に転じ、戦時下は強制収容所に囚われ、戦後はエキメニカルな場で活躍した激動の生涯。

四六判・予価3500円

フリッツ・リーマン著／赤坂桃子訳

不安とは何か その四つのかたち 「仮題」

不安は私たちの人生の一部である。不安にうまく対処し、バランスの取れた人生を生きるためにはどうすればよいか。本書は深層心理学的な視点から不安を四つの類型とそれに対応するパーソナリティに分類し、より良き対処法を豊富な例証と共に記述。一九六一年の初版以来今日まで一〇〇万部近くを売り上げた戦後ドイツのベストセラー。

四六判・予価3500円

● 5月に出た本と雑誌

日本におけるキリスト教
フェミニスト運動史

富坂キリスト教センター編 1970年から2022年までフェミニスト運動の受容と展開を詳細な年表・解説・コラムで回顧。また4人の女性の貴重な証言を付す。さらにメディア表象から異性愛規範への抵抗まで6つの重要課題を論者が考察。

◆四六判・定価2750円

神と上帝

金香花著 聖書訳語論争への新たなアプローチ

キリスト教の神を「神」と訳すか「上帝」と訳すか――。19世紀中国の訳語論争の本質を、朝鮮語と日本語における聖書翻訳と比較しつつ、信仰の伝達と意味の翻訳の両面を手掛かりに考察する。

◆A5判・定価4400円

第一ペトロ口書を読む

石田学著 釈義と説教

迫害に苦しむ初代教会へのメッセージを釈義をふまえて説教的に展開する見事な実例。

◆四六判・定価2200円

福音と世界

◆定価660円

6月号 世界教会協議会(WCC)第11回総会

寄稿者：金性済、西之園路子、鄭詩音、伊勢希、藤原佐和子、

声明・メッセージ(翻訳)／新連載 後藤里菜／好評

連載 飯田華子、金歌晃、長尾優、C・J・サンダース&

A・ヤーバー、山崎ランサム和彦、山口陽一、勝村弘也

●昨年度から、大学で一コマだけ非常勤講師をしています。ネオリベリズムの統治における差異の商品化という文脈からダイバーシティを批判的に考察するといった演習で、学期の前半はわたしの講義、後半は受講生の報告にしているのですが、正直に言って、大学に行くことが嫌で仕方ありません。念のためいえば、講義は考えを深める機会になりますし、学生の皆さんの報告やレポートからは学ぶことが多々なので、それらが嫌なわけではありません。そうではなくて、大学に行くことじたいがどうにも苦痛なのです。振り返れば自分が学部と大学院生の時はいかにサボるかをつねに考えていたような人間が、毎週決まった時間に教室に行つて授業をするなんてことがどうしてできるでしょうか。なにせわたし自身がそんな体たらくなので、受講生に伝えているのは「遅刻、欠席、居眠り、早退OKです」ということ。どんなに批判的に先鋭的な講義でも、そのあたりを引き締めることで、逆に手放してしまうものがあるように思うからです。とはいえ、内容までゆるくするのは、わざわざ出席してくれる人たちに申し訳が立ちません。何か少しでも持ち帰ってもらいたいと、自分の持てるものをその都度出し切るようにしています。結果、授業が終わ

るところにはすっかり声が枯れ、喫煙所でマズイタバコを吸つて帰るのが毎回のルーチンに。もうちょつとスマートにやれないものかと思うのですが、かつて九年間通つてもできなかったので、今更無理なんでしょう。せめて今日も遅刻せず教室に行くのが、わたしにできる精一杯です。(堀)

●小社は五月末に二〇二二年度の株主総会を開きました。売上は前期比一〇パーセント増加しました。とはいえコロナ前の二〇一九年度の水準には僅かに達しません。それでも何と四年連続で黒字の決算とすることができました。売り上げ増を支えた主な書籍は『レヴィナスの時間論』『ヤバイ神』『ロゴセラピーと物語』『ユダよ、帰れ』などでした。それぞれ、著者の知名度、朝日新聞の書評、関係団体のまとめ買い、キリスト教書店大賞受賞と、異なる要因があります。ちなみに書店大賞は創設一二回目にして初めて小社の本が選ばれました。また教科書『希望する力』『ヤバイぜい聖書(バイブル)』も多くの学校で採用されました。その反面、満を持して送り出したカルヴァン『共観福音書下』が期待していたほど伸びず、古典的な書籍に対する教会的な需要が低下している現実も突き付けられました。(小林)

福音と世界

2023年
7

A5判・80頁・定価660円・送料70円
年間予約購読料(送料共)8760円

特集・破局と希望

日本社会の危機と終末論——光延一郎
危機を生き延びる「ことば」を求めて——左近豊

エーリッヒ・フロムにおける生命と希望の思想——希望なき時代を生きるために——出口剛司
終末のアクチュアリティ——「やがて来る」から「もう来ている」へ——堀江宗正

破局・愛・希望——コトシク・マッカーシーの『ザ・ロード』を読む——菊地了
柄谷行人と終末論——福嶋揚

【新連載】

◆八木重吉の聖書——遺された(書き入れ)を読む——今高義也

【好評連載】

- ◆神と「女性的なるもの」を辿つて2——後藤里菜
- ◆グレート小林と3人の女3——飯田華子
- ◆私は告白する、私の神を4——長尾優
- ◆地域から考える在日朝鮮人史と教会史4——金耿昊
- ◆教会に於けるマイクログレシヨン15——サンダーズ、ヤーバー
- ◆「日本的キリスト教」を読む18——山口陽一
- ◆新約釈義 ルカ福音書19——山崎ランサム和彦
- ◆古代イスラエル文学史序説29——勝村弘也